

II-B-28

小細胞癌の治療成績

神戸大・放射線科

○高田佳木, 今城吉成, 足立秀治, 御勢久平,
今中一文, 芦田千尋, 一柳明弘, 渡辺英明,
木村修治
兵庫県立がんセンター・放射線科 大林加代子

過去10年間に治療を行った小細胞癌例の治療成績を検討した。対象はLimited Disease 25例(Ⅲ期15例, Ⅳ期10例), Extensive Disease 18例, 計43例でいずれも放射線治療を行った症例である。化療のみの症例は対症的治療しか行っておらず除外した。放治単独5例, 放治+化療38例で, 放治単独例中4例は昭和50年以前の症例である。化療を放治と同時に併用したのは31例で, 最近の7例は化療後に放治を行った。化療は最近の症例はCOMC+ACNUを原則として用いているが, 以前は各種多剤併用を行った。放治は2000~7200radであるが, 多くは4000rad照射した。

成績: Limited Diseaseにおける一次効果はCR:9例, PR:15例, 判定不能1例であり, うちⅢ期例における一次効果はCR:7例, PR:7例。Extensive DiseaseではCR:7例, PR:7例, NR:4例で, PD例はなかった。50%生存月数はLimited Disease 10.5ヶ月, Extensive Disease 8.2ヶ月であるが, Ⅲ期例のみでは12.8ヶ月であった。Limited Diseaseの生存率は6ヶ月88%, 12ヶ月38%, 24ヶ月17%。Extensive Diseaseでは6ヶ月67%, 12ヶ月6%, 24ヶ月0であった。Ⅲ期症例のみでは12ヶ月60%, 24ヶ月は, 27%4例であり3例は現在生存中, 最長60ヶ月生存中である。Limited Diseaseにおける一次効果別生存率は, CRで12ヶ月56%, 24ヶ月33%, PRでは12ヶ月27%, 24ヶ月7%とCRとPRに差がみられた。しかしExtensive Diseaseでは一次効果による差はなかった。我々の症例では, 化療後放治を行った群と放化同時併用群の間に予後, 一時効果に有意差は認められず, Limited DiseaseでもⅣ期群はExtensive Diseaseと予後において差はなかった。以上, Ⅲ期までの小細胞癌には速やかにCRに導入する為, 放射線治療は強力な治療法であると考え。なお, 今回の検討には維持療法を考慮していないが, 初回治療後強力な化療を行った症例は少く, 免疫療法も過半数に行っているが有意差が出る程ではない。今後, Ⅲ期までの症例には放射線治療を中心とした化学療法の組合せを検討して行きたい。

II-B-29

肺癌切除例におけるCEA値の検討

長崎大学第1外科

○綾部公懿, 君野孝二, 田川 泰, 石橋経久,
江口正明, 高田俊夫, 中尾 丞, 川原克信,
中村 譲, 富田正雄

CEAは現在大腸癌をはじめとする悪性腫瘍の診断, 術後再発の予知などに広く用いられているが, 肺癌にもCEA陽性例が高率にみとめられ, その有用性が報告されている。今回, われわれも肺癌切除例について血中CEAの測定をおこない, 肺癌病期, 組織型, リンパ節転移, 手術の治癒度と血中CEA値との関係を比較検討した。さらに腫瘍組織内CEA量を測定し, 病理学的諸因子および血中CEAとの関係を検討したので報告する。

原発性肺癌51例を対象としたが, 血中CEA値は術前, 早朝空腹時に採血し, Dinavot社のRIAキットを用いたsandwich法により測定した。組織内CEAの測定は手術時に摘出された癌組織および非癌組織より1gずつを採取し, これをハサミで細切し, 5mlの生食水を加え, homogenizeしたあと遠沈し, その上清を材料として血中CEAと同様の方法で測定した。

肺癌51例の術前CEA値は最低 1.0 ng/ml から最高 55.1 ng/ml を示し, その陽性率は52.9%であった。CEA値とStageの関係をみるとStage I 40%, Stage II 80%, Stage III 68%, Stage IV 40%とStage II, IIIに陽性率が高かった。組織型別では扁平上皮癌50%, 腺癌57.7%, 大細胞癌42.9%と各組織型との間に陽性率に差はみられなかったが, 腺癌にCEA高値の例が多かった。リンパ節転移とCEAとの関係をみるとリンパ節転移陰性例では45.8%, 肺門リンパ節転移陽性例50%に対し, 縦隔リンパ節転移例では, 73.3%が陽性であり, 有意に高率であった。また治癒切除例の陽性率は50%, 準治癒切除例では54.5%であったが, 非治癒切除例では70%と術前CEA陽性率が高かった。肺癌手術後のCEAの推移についても検討したが, 治癒切除例では陰性化する例が多かったのに対し非治癒切除例では陽性値を持続する傾向がみられた。

組織CEA値は20例について測定したが, その平均CEA値は 2745 ng/g で非癌部肺組織の平均値 343 ng/g に比べ著しく高値を示した。組織内平均CEA値を組織型別にみると腺癌 4295 ng/g , 扁平上皮癌 1672 ng/g , 大細胞癌 2310 ng/g と腺癌で高値を示した。しかし組織内単位重量あたりのCEA値と血中CEA値とを比較検討したが, 両者間に相関はみられなかった。

肺癌の血中CEA値が陽性となる因子として癌の進行度, リンパ節転移の程度が関与するが, この他脈管侵襲の有無, 癌組織間質の量, 組織産生量といった因子との関係も検討したので報告する。